

# オルタナティブツアー

## Tanzania

Japan Tanzania Tours

根本 利通



1984年の年末のことであるから、もう23年も前のことになる。キリマンジャロ山に向かって登っていた。急勾配、つづら折が続く、周囲は緑、といっても森林ではなく、めいっぱい耕されたバナナ、コーヒー畑などが続いているから、山頂は見えない。たっぷり汗をかいて小1時間登り、ちょっと開けた場所に小学校があり、小さな店があった。

タンザニア北部キリマンジャロ州ハイ県のルカニ村。当時ダルエスサラーム大学に留学していた私は、休みを利用して、大学で働きながら学ぶアレックスさんの故郷の村にやってきたのだ。ルカニ村の平均標高は1,500mを超え、起伏が激しい地形である。戸数約350、人口約1,500人ほどのチャガ人の農村である。

オルタナティブツアー(AT)「タンザニアの大地」を始めたのは1986年だった。ある東京の旅行社が企画し、その後大阪の旅行社のマイチケットが加わり共同企画となった。途中2年ほど中断があったが、ほぼ20年くらい続いていることになる。

私たちがこのATタンザニアの受け入れを始めたのは、次のようないきさつからである。自分が日本の社会を離れ、大学院生という形でタンザニアに生活を始めた当時、社会主義の不振、ウガンダのアミン政権との戦争の負担で、タ

ンザニア経済はどん底であった。ダルエスサラーム大学の寮での生活も、停電・断水は日常茶飯事で、石鹸やバケツ、油、トイレトペーパーというような日用品でも、闇市場で探さないと見つからなかった。タンザニア人の学生たちもまず生活を維持することに汲々としていた。外国人である私などは、寮で働いていたアレックスさん、グビさんの援助がなければ、生活を続けられなかっただろう。

当時確かにタンザニアの生活は大変だった。でも周りの人々は、生活力のない外国人に救いの手を差し伸べてくれたし、彼らの生活に余裕や笑いがなかったわけではない。週末、まだお互い独身だったアレックス青年、グビ青年の家に行き、おしゃべりをしたり、ディスコに行ったり、親しくなるにつれ、「今度の休みに故郷の村に帰るけど、一緒に行かないか」となるのは自然だった。

ルカニ村を訪ねた時は、タンザニア滞在半年経っていた。当時は健在だったアレックスさんのご両親の家に泊めてもらった。アレックスさんは10人姉弟の7番目。当時、4番目までの姉は既に婚出し、5番目以降の兄弟たちもアレックスさんを含め学校に行っていて、実家には誰もいなかった。誰一人義務教育である小学校で終わった子どもはなく、ご両親は子どもたちの教育にかなりの思いを注ぎ、



身を粉にして働いておられた。

私は息子の大事な友だちで、完全にお客さんだった。朝から晩まで、3食以外に、ミルク、キャッサバ、焼きバナナなどを差し入れられ、近所に散歩に行けば、また知り合いの家で何かしら振舞われて、飽食の滞在だった。アレックスさんの家は裕福ではなかったから、当時電気はなく、水道も村の共同水道から汲んできていた。でも水はなにせキリマンジャロの雪解け水で美味しいし、夜は満天の星空だった。ダルエスサラームの喧騒、生活の困難を忘れ、豊かな時間が流れていった。

一方で、当時「アフリカ飢餓キャンペーン」が広がり、ユニセフの親善大使だった黒柳徹子が、キリマンジャロの村でやせ細った孤児を抱いて、義援金を募ったことに違和感を持ったことが手伝って、AT タンザニアの受け入れを決めたのだ。つまり、「時間がゆったり流れるタンザニアの農村に滞在し、日本での自分の日常を振り返ったら、豊かさの指標が少し変わりませんか？」という旅を創りたい、日本人たちに経験してもらいたいと思ったのだ。

日本人は忙しくてなかなか長期の休みが取れないから、催行時期は8月。それでも、学校の先生や学生さんが主体になる。そんな日本のどこが豊かなのだろう？と思うこともたびたび。無理して休んできた会社員や自営業の男性からは「いい人生をやっているね」と言われたこともある。でも、魅力的なのはタンザニアの農村とそこに住む人たち

である。一時期、このAT タンザニアは「転職者を生み出す旅」と言われた。日本での仕事に行き詰まりを感じていて、何か方向転換を考えていた人たちが、タンザニアを体験して、次の一步を踏み出して行ったのだろう。別に「環境」だとか「援助」だとか「ロハス」だとか、たいそうなお題目を掲げたツアーではない。タンザニアの農村の生活のリズムに身を任せ、自分の生活を省みる、それだけだ。過去20年間で、200人以上の人たちがAT タンザニアで農村滞在を経験した。

日本人だけがいい思いをして帰って行くのは一方通行だから、受け入れたタンザニアの人たちも普通の日本人の家庭に受け入れて欲しい、というのもこのATの開始当初からの条件だった。AT参加者の費用の一部を積み立て、ある程度たまったら、タンザニアの人を呼び、日本の自分たちの家庭でもてなすという相互交流だ。アレックスさん、グビさんは過去20年で2回ほど日本へ呼んでもらった。

そうやって続いて来たAT タンザニアの発展上として会社になったのが、私たちの会社JATA ツアーズで、1999年営業開始、来年は10周年になる。日本人の新人スタッフがやってくると、アレックスさんに連れられて、会社の原点ルカニ村に研修に行く。JATA ツアーズは、AT タンザニアをやるために作った会社で、商売を続けながら、自分たちを省みる運動の一環の上にある。

AT タンザニアの目的地、つまり農村滞在の村はルカニ村だけではない。過去20年間いくつかの村に受け入れてもらったが、ここ数年の目的地は、キンゴルウィラ村（モロゴロ州）、テマ村（キリマンジャロ州）、ブギリ村（ドドマ州）の合わせて4カ村である。テマ村はタンザニア・ポレポレクラブというNGOの植林などの村おこしの活動場所。ブギリ村は天才音楽家故フクウェ・ザウォセの生まれた村で、今年11月に来日する楽団CHIBITEの故郷である。テマ村はNGO・協力活動に興味ある人、ブギリ村は特に民族音楽に興味ある人にお勧めである。

ただ、ルカニ村と並んでAT タンザニア開始以来、絶えず日本からの訪問客を受け入れてきたのはキンゴルウィラ村である。この村はグビさんの故郷である。

ルカニ村がキリマンジャロ山麓で降水量も多く、豊かな農村であるのに対し、キンゴルウィラ村は平坦地にあり、降水量はやや少ない。8月の乾季は朝短い時間にしか水が出ない。水道から水が出ると女たちは急いで水をため、洗濯をし、煮炊きをする。だからバケツにためてもらった水で水浴びをするのは、やや申し訳ない気になる。

キンゴルウィラ村は1970年代後半に、ウジャマー村化された。協同組合を中心にした農村社会主義政策による。それぞれの畑とともに散在していた家が村の中心に集められたのだ。キリマンジャロ州のように豊かな農業先進州にはウジャマー村の適用は強制されなかったから、自然な散

村であるルカニ村と、集村化されたキンゴルウィラ村との違いはよく分かる。キンゴルウィラ村はダルエスサラーム～モロゴロの幹線道路の両脇に家や市場、小学校が並んでいる。グビさんの家も国道のすぐ近く。ただ畑は家からかなり離れた所にあり、歩くと1時間はかかるから、農村

滞在をする人たちはレンタル自転車で行く。遠いけど水場が近いから畑としては立地がよく、すぐ近くまで外国人が買い占めた果樹園が広がってきて、グビさんの畑も狙っているけど、頑として売っていない。

Karibu Tanzania! (タンザニアによろこそ!)

## 参加者の声

キンゴルウィラ村に着いた時、3泊4日どんな日々になるのだろうと多少不安がありましたが、着いて早速子どもたちが声をかけてくれ、村に踏み込んだ時の緊張が一気にとけました。村の中を歩いていても、言葉も分からない異国の人間に対して、気さくに話しかけてくれ、警戒するでなく、とても開放的に受け入れてくれた感じがします。スワヒリ語が話せたらもっともっと楽しめたと思います。いろんな人と沢山会話ができて…。4日間子どもたちと山程遊びました。畑やマーケットにも連れていってもらいました。

あっという間の4日間でもう少し滞在したかったなあと思いました。ラマダンの時期なのに、私たちのために食事をつくってくれたお母さんたち、どうもありがとうございました。とってもおいしかったです。

(2007年夏参加) M.Sさん

